



# ミュージアムコラム

武庫川女子大学附属総合ミュージアムでは、所蔵する国の登録有形民俗文化財「武庫川女子大学近代衣生活資料」全 9,092 点から季節の主題に沿う資料を選び、一年を通じて学術研究交流館（IR 館）1 階ロビーにて展示をおこなっています。

2025年度 春季企画

## 春の鳥、色とりどり展

2025年4月11日(金)~6月13日(金)

春は植物の芽吹きとともに、どこからともなく鳥の鳴き声が聞こえてきます。ツバメ、ウグイス、メジロ、カッコウなど、春を告げる鳥もいれば、スズメ、ハト、ヒヨドリなどの年中どこでも見られるお馴染みの鳥も元気に活動しています。

「春の鳥」と銘打ってしまうと語弊があるかもしれませんが、このような鳥たちは、春暖かい場所で棲息し、繁殖期を迎えます。日本で年中見かけるオウムやクジャクも、もとは東南アジアなどの南の島々からやってきた鳥で、やはり温暖な場所で活躍します。

今回の企画展示では、モスリン裂や着物に表されたオウム、クジャク、スズメ、ツバメの可愛い姿をご鑑賞ください。春らしさを感じていただければ幸いです。（平）

### 1. 鸚鵡文様長着（大正~昭和初期）



鸚鵡が装飾的な止まり木に留まる形式は、伊藤若冲《鸚鵡図》に通ずるが、江戸時代の写生図譜、書物の挿絵や広告等にもよく見られ、写実的に描かれている。

この鸚鵡は、薄い桃色の身体に黄色がかった尾をもち、濃淡を効かせた立体的な表現である。本来、鸚鵡は東南アジアから赤道直下の熱帯森林に棲息し、これもオオバタン（インドネシア産、絶滅危惧種）などの白色オウムの一種と考えられる。江戸中期以降、中国やオランダから輸入され、見世物の「唐鳥」として人気を博した。

## 2. モスリン地孔雀文様裂 (大正~昭和初期)

## 3. モスリン地雀と桜文様裂 (大正~昭和初期)

2は淡いパステル調の、メルヘンタッチな孔雀や花の文様が可愛らしい。孔雀は南国の熱帯雨林に棲息するキジ科の鳥で、雄は華麗な飾り羽をもち、春に繁殖期を迎えると、雌への求愛行動としてその羽を大きく広げる。繁殖期を過ぎると、飾り羽は抜け落ちて生え変わるため、その美しい姿は春にだけ見ることができる。

3は、散らした扇面に2種の絵柄が表される。1種が満開の八重桜の枝に止まる雀2羽、もう1種が室内から桜景色を鑑賞する衣冠束帯の貴族である。八重桜は4月中旬から見頃を迎える。雀は1年中見られるが、春に繁殖期を迎え、桜と組合せて春のモチーフとなる。落ち着きなく間断なく囀る様子から、子どもの象徴とされ、その文様は子ども用品に使用される。



## 4. 燕文様長襦袢 (昭和初期)



アール・デコ調の抽象的な電線と、それを足場として利用する燕の姿を表す。

燕は「春を呼ぶ鳥」といわれ、寒い冬には南国で過ごし、晩春になると古巣に戻り、繁殖期を迎える。また、蚊などの害虫を駆除する「益鳥」としても尊ばれてきた。初夏の風物詩でもあり、夏物の着物の柄に使用される。この長襦袢も涼し気なデザインである。

次回の展示は、2025年6月下旬を予定しています。